



歴史研究の隣人たち : 第1回 家じまいアドバイザー ® 屋宜明彦さん (インタビューシリーズ)

屋宜, 明彦
市沢, 哲(司会)
井上, 舞
木村, 修二
古市, 晃

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 11:63-88

(Issue Date)

2019-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011928>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011928>



インタビューシリーズ 歴史研究の隣人たち

第1回 家じまいアドバイザー® やぎあきひこ 屋宜明彦さん

司会 市沢哲
同席 井上舞・木村修二・古市晃



歴史研究の隣人たち

歴史について考えたり、歴史を取り扱うことは、アカデミックな歴史研究者が独占するものではない。本地域連携センターの活動の中でも、大学の歴史研究と市民社会における歴史に関する意識のギャップがしばしば問題として立ち現れてきた。そして、このギャップについてどう考えるのか、両者をどう架橋すればよいのかは、地域連携活動を貫く重要な問いかけになっているといっても過言ではない。

一方でアカデミックな歴史研究の分野においても同様のことが問題となつて久しい。専門的研究者が研究成果を社会に「還元」するかたちではなく、様々な人々の主体的参加の下に相互的に歴史を作り出していくことを目指す「パブリック・ヒストリー」の存在感が徐々に増しつつある。

*

以上のような問題関心を念頭に置いた時、その前提として、日常生活において一般の人々がどのようなプロセスを経て歴史認識を形成しているのが問題として浮上してくる。欧米のパブリック・ヒストリー研究ではすでにこの問題に取り組んでいるようであるが、日本について

言えばリサーチは本格的に行われておらず、その実情は十分に論じられていないように思える。何故人々の歴史認識形成の媒体になっているのか、その媒体の作り手たちの「仕事ぶり」はいかなるもののだろうか。そしてそもそも、人々は日々どのように歴史に関わっているのでしょうか。その関わり方の中には、一見歴史との関係が明らかでなく、見過ごされているものもあるかもしれない。

*

日常世界の中で意識、無意識を問わず、歴史に関わっている人々を「歴史研究の隣人」と呼ぼう。「隣人」という呼び方は、こちらとあちらを区別して隔てるようなニュアンスが感じられるかもしれないが、すでにもう隣りあわせの関係にあり、むしろこれからより親密な関係を築いていく相手として、親しみを込めて「隣人」と呼びたい。

本特集のねらいは、これら「隣人」の歴史との関わりに光を当て、パブリックな空間における歴史のあり方の実情を少しでも具体的に明らかにしていくことにある。またそのことよって、「パブリック・ヒストリー」が目指すような、大学も含めた様々な主体が連携する新しい糸口を探りたいと思う。

今回のインタビューについて

第一回目の「歴史研究の隣人たち」のインタビューにご登場いただく屋宜明彦氏のお仕事は、遺品整理を中心とする「家じまい」のアドバイザーである。具体的なお仕事については、インタビューをご参照いただきたいが、私たちの活動との関係でいえば、「家じまい」にともない、古文書をはじめとする歴史遺産が廃棄、売却される可能性が易に想像できるだろう。

昨年、屋宜氏から、「家じまい」の現場で見つかった古文書をどう処分するか思案しているという連絡を受けた。「家じまい」の依頼人の許可を得て、現場に向かった。そこにはそれほど量は多くないが、近世、近代の古文書があった。また、現場とは別に、依頼人の本宅（の母屋）に古文書群があること、かつてその一部（蔵に収められていた文書）が某自治体に寄贈されたことを聞いた。

本宅も「家じまい」に着手する予定であるということだったので、依頼人と相談し、両方の古文書を前回の寄贈先と同じ自治体に引き取ってもらうことにした。一連の経過の中で、私自身、「家じまい」が歴史史料の行方と深く関わっていることを実感できた。

歴史を研究しているものからすれば、このような場合、どうやって歴史史料を保全するかが優先的な目標になるが、その前に「家じまい」の実情を知っておく必要がある。「家じまい」自体を歴史的な現象としてとらえ、史料と併せてメタ・データとして何がおこったかも伝えていくべきだろう。

屋宜氏の語る「家じまい」の実情をふまえて、歴史遺産の失滅を防ぎ、受け継いでいくために何をすべきか、考えてみたいと思う。

（市沢 哲）

一 屋宜さんの仕事の概要

市沢 お忙しいところ、今日はどうもありがとうございます。まず屋宜さんのお仕事の概要と、いつごろからどんな経緯でこの仕事をされるようになったかという点について簡単に説明いただいていいですか？

屋宜 遺品整理という仕事自体は、シンプルに言えば、亡くなられた方の部屋の最後の片付けということですね。基本的には遺された家族・身内・親しい友人であるのが本来の遺品整理ですが、昨今片付けたくても片付けられないとか、身内だけではできないという方が増えてきて、他人が他人の家を遺品整理するというので、遺品整理サービス業というのが生業として成立してきたんだろうと思います。

実際に僕がこの仕事をいつからやっているかというと、もともと僕は廃棄物処理業をやっているとして、その廃棄物処理業の中で遺品整理みたいなことを一十九年ほど前からさせてもらっています。ただ当時は、遺品整理ではなくて不要品回収ですね。ただ単にゴミとして回収してゴミとして捨てるというだけのビジネスモデルだったのを、ちゃんと故人を弔う気持ちを持たないといけない、ということでの今のような遺品整

理事業としてスタートしたのは九年前でした。

市沢 今、どれくらいの規模で仕事をされていますか？

屋宜 僕の会社は二つありまして、ひとつは一般社団法人「心結」、これは理事に弟がいて、二名でやっています。もう一つは、株式会社「スリーマインド」といまして、今はパート・アルバイトを含む一一名で運営しています。スリーマインドでは年間四五〇件ぐらいの遺品整理・生前整理をしているのですが、一社一一名だけではとてもじゃないですけどすべてをカバーできないので、同業他社の遺品整理屋さんの中からよりすぐりの会社を三社さんご協力いただいて、今トータル四〇名体制で、年間四五〇件ほどさせてもらっています。

市沢 四五〇件ですか！ エリアは？

屋宜 近畿二府四県のみです。スリーマインドは、近畿二府四県のみでしか対応できないような会社なんですけど、実際相談として入るのは、自分は関西に住んでいるが親が東京にいるとか、親の家が名古屋にあるなどという話なので、それを一般社団法人「心結」の方で、同業の遺品整理業者、パートナー企業を募って全国対応できる組織づくりをおこなっておりまして、それが今のところ心結の方では八社登録させてもらっています。

市沢 こういうお話というのは必要が生じないとなかなか自分でも関心を持たないのかもしれませんが、屋宜さんが書かれているものによれば、良いも悪いも含めていろいろな種類の業者がいるというお話ですが、業界全体の状況というものは屋宜さんにはどのように見えていますか？

屋宜 業界全体の流れとしては、遺品整理業者は『日経新聞』の調査ですと、現在一万社あるといわれています。その一万社というのは、東京都とか名古屋とか大阪など首都圏や大都市に集まっているという傾向が全体としてありますが、基本的には遺品整理の“なりわい”としては有象無象の状態です。要するに片手間で行っている業者が圧倒的に多いですね。内装工事業者が遺品整理、解体業者が遺品整理、ごみ屋が遺品整理、不動産屋が遺品整理というように有象無象な状態になっていて、本業じゃない人たちが遺品整理を業として担っているのが現状だろうと思います。僕が九年前にスタートした頃などは、(一般には)なんでも屋が遺品整理をしているというようなレベルでした。買取屋が遺品整理をするとか、古物屋さんが遺品整理をするとか、そんな状態だったのが、今はもう遺品整理が儲かるぞみたい状況なので、便乗していろんな業界が参入してきているというのが現



屋宜明彦さん

しは必要としている人が増えているということですか？

屋宜 多いと思いますね。どかが調べたのかわかりませんが、何かの本で見たのですが、遺品整理の市場規模はおよそ八〇〇億円といわれています。それは多分違うと思いますがね。いずれにしてもマーケットとして

は大きい。結局、超高齢社会に入ってきましたので、単身世帯が増えたりとか、独居老人が増えたことで、片付けたくても片付けられないというのは、これも現状だと思いますね。

市沢 今は遺品整理会社が大都市に集中しているとおっしゃいましたが、仕事の感じとしては、近畿二府四県のなかで地方とか都市とかなどで、なんらかの傾向はあるのでしょうか。例えば（依頼が）多いとか少ないとか。

屋宜 僕の会社で言えば首都圏や大都市が多いですね。大阪市、神戸市が一番多いですが、地方もあります。ただ地方の場合は絶対片付けられないという物件が多いですね。家が大きい

ぎるとか、もと農家で農機具があるとか。何か商売していたけどおそらく普通の人では片付けられないだろうという状態は地方のほうが多いです。たとえば和歌山とか。この間は丹波篠山や豊岡へも行きまして。

市沢 われわれ地域連携センターがよく連携事業で行くようなところですね。

屋宜 地方に行けば行くほど信用できる業者がないとか、最後までしきれないとかという課題があつて、でも僕らは、「そこまで行くのはしんどいですわ」つて（冗談を）言いながらも、でも行っています。

市沢 都市の片付けと、田舎の片付けは全然違うということですが、そこで屋宜さんの会社としては、むしろ場数を踏みながらノウハウを広げていくという方針なのですか？

屋宜 そうです。初めて当たるエリアは僕らも悩みますね。とくに廃棄物コンプライアンスです。ゴミを処分するには結構手間がかかりますから、それをクリアして、どこへ行っても廃棄物処理業というのは限りなくグレーなんです。できるだけ「シロ」に近く持つて行くことと思えば結構大変です。

市沢 さきほど少しお聞きしたのですが、片付けられないというのは、それだけ色々なものがあつて、ということですか？

状かと思いません。品質が担保されてなくて、基準もないので、「騙された」とか「えらい目に遭った」とか、そういう経験をした人がいっぱい出てきているというのが現状かと思えます。なので遺品整理の専門会社というのは正直少ないですね。僕から見ても少ないです。うちのスリーマインドは遺品整理の専門会社で、それ以外にしておりますが、遺品整理しかしていないという会社は正直少ないですね。

市沢 増え続けているという感じですか？

屋宜 有象無象なので多分もつと増えると思いますよ。

市沢 それはやはり、それだけマーケットない

屋宜 はい、いろんなものがあります。おもしろかったのは、もともとおじいさんが金物屋をやっていた、子供が跡を継がなくて、(商品の)

金物も売れるものが何もないけどどうしようというケースがありました。本人は処分にお金をかけたくないわけですよ。けれども需要として、それが売れるかという売れないという時代です。僕たちとしては、これは産業廃棄物になりますよという話はしますが、本人はとにかく処分にお金をかけたくない。結局折あいがつかないという話になります。

市沢 なるほど、そういうこともあるんですか。

屋宜 いろいろ調べてみると、全部を産業廃棄物で処分しようとすると莫大なお金がかかるんです。だから処分品を必要とするところがないかと思って、一応調べるわけです。そうしたら、これはいいなと思ったのがフイリピンなどの貿易ですね。その商材を商材として買ってくれる国もあるわけです。その件は、写真を撮って、買ってくれないかと、今リサーチをかけています。あとは、貿易筋にも色々税関関係でかかるお金もありますから、それとプラスマイナスで合うかどうかなども検討します。

市沢 その金物屋さんはまだ商品を持っていたのですか？

屋宜 商品を持っていました。昔の物とか、ブ

ラシがあつたりとか。荒物ですね。

木村 僕らの感覚でいえば、そういう古いものがひよつとしたら文化財というカテゴリーに含まれる物かも知れないと考えるわけです。それを捉えるためには、屋宜さんのような方との繋がりが、今後ひとつの鍵になってくるのではないかと思います。

屋宜 僕も市沢先生とお会いすることで思いました。

市沢 この間、連携が成功した例が一件ありましたね。

二 仕事から見えてくる日本社会

市沢 では、片付けの現場から見えてくるものに話を移していきたいと思います。屋宜さんがおっしゃるには、色々な現場があるということですが、日々仕事の件数が増えてくるのか、いろいろな人たちが業界に入ってくるということも含めて、お仕事から感じられていること、あるいは日本社会というのは屋宜さんからみてもどのように見えていますか？

屋宜 僕も遺品整理の仕事をするまでは、そんなに深く考えたことはなかったんですが、依頼者というのは、基本的に片付けたくても片付けられない遺族の人なんです。社会的な問題とし

ては、どこにでも書かれてあることですが、超高齢社会、独居老人とか核家族化のために、要するに片付けたくても片付けられないっていうことが浮き彫りになって、そのために他人の手助けが必要なのではないかということがいわれていますが、もう一点、社会問題化されているのは、僕は現場人なんですけど、ゴミの分別ルールが年々厳しくなってますね。一五年前とかは可燃・不燃ぐらいしかなかったですよ。ところが今は、可燃・不燃・ペットボトル・その他プラ・小型家電・リサイクル・新聞・雑誌・段ボール・ポロという風になって、分別だけでも一〇品目から一五品目ぐらいはあるわけです。これを遺品整理の現場で、要るものは形見分けとして置いておく。買取れるものは買取ってもらおう。供養すべきものは供養する。ではあとはいらぬものということで、いざ処分しようと思っても分別作業だけで莫大な時間をとられるんです。となったら、なかなか家族だけで行うのは難しいのではないかなと思います。

一方、この業界に参入してきている業者が、どういう思いで参入してきているかという点ですが、僕はいろいろな遺品整理屋から相談に乗るんです。(遺品整理業を)立ち上げようと思いうから協力してくれないかとか。こういう風に



写真 仕分け作業風景

一〇社ほどありましたが、何社が残ってるかと調べたら一社も残っていない。上手くいかないんです。このご時世、お金を追いかけたらいいませんね。

市沢 家の継承がうまくいかなってきているという状況は、現場で見ている感じられることがありますね。

屋宜 そうですね。基本的に、親は自分が死んだらこの家あげるからな、といっているのですが、子供は基本的に継がなくなっていることが多いですね。

市沢 別のところに行ってしまった…。

屋宜 都市部でも田舎でもそうです。お客さまをみているとその家はいらないから売るといのが大半ですね。きちんと家を継いでいる人からは僕らに（遺産整理の）話はまわってこないですから。

実際には都市部であろうと、お金持ちの方であろうと、閉じる家は閉じます。その原因は核家族化の問題ではないでしょうか。子どもはすでに別のところでマンションに住んでいる、ということ、親が住んでいた家を置いていても結局誰も住まない、ということ、家を処分される…。

市沢 親の家に戻らないということですね。

屋宜 戻らないです。先日作業した現場で、西宮の中心部の駅から徒歩二分という超好立地の家でも売るといふケースがありました。その場合も子供はすでにきちんと生活してましたから。事情を伺いますと、その依頼人が六十代後半で、お子さんが二人おられるけど、子どもたちは別の土地に住んでいて、もう西宮には戻ってこない。だから置いていても仕方がない。子どもたちに迷惑をかけたくないから自分の代で閉じるということでした。

そのおたくは、本の量がすごかったですね。二トントラック三台分ぐらいありました。

市沢 趣味の本ですか？

屋宜 専門書ばかりです。趣味の本ですと買い取りができるんです。しかし専門書はあまり買えないですね。

木村 専門書を引きたった後はどうされるんですか？

屋宜 古紙回収です。もちろん、買い取り業者にも入ってもらいました。古書組合というのがあって、そこにも入ってもらいましたが、買い取ってくれたのは数点ですね。

市沢 下世話な話ですけど、転売益のあるところはそうしてもいいですが、たとえば地方などに行かれたらどういった傾向がありますか？

屋宜 売れないです。丹波でよく作業をするんですが、丹波だと相続で受け継いだ家が売れないという現状がある。「屋宜さん買って？」と言われたこともあります。もちろん買えません。銀行が非常に高い評価額をつける傾向があつて、たとえば「二〇〇〇万円ぐらいになります」と言つたとしても、現状その値段で売れるかといえば、地方では二〇〇万円でも買い取ってくれないわけです。評価額をつける機関がどこかというのは結構大事です。

市沢 そういう場合はどうなるんですか？

屋宜 塩漬けになってますね。自治体に家を物納をしようとしても、市もいらないますよね。



基本的に売れる土地は自治体も喜んでもらいますが、売れない土地は自治体もいらないう話ですね。

井上 自治体が引き取ってくれないという話はよく聞きます。古文書や民具なども似たような感じですよ。

屋宜 僕がセミナーでよく言っているのは、「わしが死んだらこの家あげるからな」などといったげんなことをいうな、と。自分の土地が売れるかどうかというのは、自分が元気なうちに調べて、売れるかどうかのチェックはしておいてくれという話をよくします。結構、親というのはいいかげんでね。自分は高いお金で買ったも

んですから。

木村 生前整理の相談などはたくさんあるのでしょうか？

屋宜 僕らは四五〇件のうちの三割ぐらいが生前整理です。今の家を閉じて介護施設に行くというのが生前整理の大半ですね。これは意識が高いうちの会社の場合ですが。

木村 こちらの話に引きつけて伺いますが、たとえば文化財とか資料などいえるようなものが、「これをどう処分するか」というのが、生前なら確認できるわけですが、亡くなってしまうとできなくなってしまうのが非常に多いです。もちろん遺族がおられる方がいいのですが。

屋宜 遺族とも生前に会話してらかっていうと、していません。本当に価値があるものとか、歴史的価値があるものかどうかすらわからないわけです。生前に、価値があるものはきちんと査定に出すとか、しっかりと調べるとか、遺族に伝えておくということが僕は大事だと思うので、それは常に言ってますね。本人しかわからない、子供は何も知らないというケースが

多いです。

三 仕事の現場・仕事の実際

市沢 屋宜さんが印象に残った現場というのはありますか？

屋宜 悪い事例で言うと、孤独死、孤立死、自殺、殺人、これを「特殊」と呼びますが、「特殊」現場というのは常につらいものがあります。でもこれはもう仕方がない。社会問題化しているものですから。僕はやはり「逆離縁」はかわいそうだなと思いますね。親より先に子供が逝くとか。子供の遺品整理する親というのは見ていて非常につらいものがあります。あと、これも社会問題なのでしょうが、老老介護の問題ですね。実際西宮の現場であったのですが、介護をしている母親、介護を受けている父親の二人暮らしで住んでいて、先に介護をしてるほうのお母さんが倒れて、その後お父さんの面倒誰も見てくれる人がいないから、あと追いかけるように（亡くなって）二人がご遺体で見つかったという現場でした。そこで遺品整理をしていて、依頼者は息子さんですけど、息子さんは仕事があるためかどうか知らないですが、孫に任せると。ずっと作業に立ち会っているのが一六歳の男の子という…。もうかわいそうでした。近所



写真 ゴミ屋敷から出た廃棄物

の人からくさいとかなんとかと文句を言われて。すごい強烈な臭いなので。それを孫と一緒に作業していたときはやはりつらいなと思いましたが。

だからここで気づいたのは、僕はいつも現場をまわらせてもらっていて、例えば夫婦二人で生活しているから大丈夫だろうと、子供もたかくくくっているわけですよ。でも親が高齢であるなら、常に気遣ってあげるとか、気にすると

いうことは、とても大事なのではないかと思えます。

市沢 その点では、いま近所の人の話が出て来ましたが、以前屋宜さんの書かれたものを読んでいたら、ゴミ屋敷対策について書かれてあって、近隣との繋がりが断たれていくというのが問題だと述べられていましたが、やはり孤独死のような事例は、近隣との関係が上手くいっていないということなのか。

屋宜 いま孤独ですよ。近所とのコミュニケーションをとらない。だから孤立していくわけです。よくあるのが、もともとあまりコミュニケーションをとるのが得意ではないけど、民生委員などが会いに行くと、最初は玄関を開けて、玄関の前で話しをしていた、と。次にもう少し部屋が散らかっていると、玄関の扉半分ぐらしか開けなくなる。さらにその次に玄関の扉の隙間から目を見せるだけで、開けてくれなくなる。どんどん自分から閉鎖的になっていくというのはよくある話です。普段から、きちんと片付けて、コミュニケーションを取ろうねというように僕は普及活動をやっていきます。あとは地域の人たちでちゃんと連携して、外に出やすい

環境にするとか、話しかけやすい環境を作るといえるのは、地域全体でやっていかないといいことだと思えます。

川西市の中の一つの地域の取り組みでしたが、半径二〇〇メートルでそういうカバーをして行く、半径二〇〇メートルの街づくりみたいなものがあつて、とても素敵だなと思いました。なかなかできないです。昔でいうと隣近所というレベルの話だったのでしょうが、もう少し超える必要がありますから、二〇軒隣ぐらいでしたらみんなが連携すればカバーできるのではないかなと思います。

市沢 そうやってカバーしたら、話をするようになるということですね。

屋宜 そうです。悪い事例だけではなくて、成功事例から僕が学ばせてもらったのですが、池田市で作業させてもらった現場で、九七歳の男性で僕が連絡もらつて伺ったのが病院のベッドの上だったんです。病院のベッドの上でおいさんといろいろ話しをして、家がらかつてるからこういうふうに片付けしといてくれといわれて、部屋を見に行ったらゴミ屋敷状態です。このおいさんは部屋の中でこけて頭を打って足を折って入院したそうです。本来なら頭を打って気を失って、足を折って動けないから孤独死して

もおかしくないですよ。でもこの人が病院のベッドの上に行くことができた、というのがポイントなんです。この人のケースがすごいなと思ったのが、文化アパートに住まっていたのですが、その前に花壇があつて、毎日決まった時間に（そのおじいさんが）水やりをしていたんですよ。それで、近所の人が、「あれ？ いちやん水やりしてへんやんか」ということで気にかけてくれて、早期発見で病院に行くことができた、と。

だから、いつも言っているのですが、高齢になればなるほどですが、毎日同じ行動する人がいる。顔を合わせるひとがいる。自分のことを気にかけてくれる人がちゃんとそばにいるっていうのは、孤独死・孤立死を防ぐコードの一つではないかなというところは、このおじいさんに学ばせてもらいました。そういう良い事例もありますね。僕は部屋で亡くなることは別に悪くないと思うんです。なんならむしろ理想ですよね。自分の長年住み慣れた家で死ぬるといふのは最高のことですが、亡くなったことに誰にも気づかれないことが社会問題なんです。だからその人が亡くなつてもすぐに見つけてあげられる地域づくりをするとか、環境づくりをするということが僕は大事かなと思いますね。夏場だと（亡くなつてから）三日たつともうアウトで

すね。

井上 ゴミ屋敷の話聞いて自分の経験を思い出したのですが、資料のレスキューをするためにある空き家に入つたらゴミ屋敷で、日用品の中に歴史資料が紛れている状況でした。所蔵者の方は、出て行かれる直前までそこに住んでおられたと聞きました。あそこで生活をされていて、どうやってここで住まっていたのかと考えると、何か切ないような、上手く言葉にできない気持ちになりました。

屋宜 そのうち慣れてくるんです。僕はよく分析するんです。ゴミ屋敷でも、地層状になっていて、掘り下げていくとその人がどうやって生きていたかが見えてくるんです。ワンルームで男性が一人孤独死した現場で、そこを掘り下げていいたら、給料

明細がある。土木仕事をされてたんだと。給料明細の額をみると、まあまあ良い金額もらつておられたんだと。もう少し掘り下げてみるとゴルフセットが出てくるんです。こんな生活してるのにゴルフをしたのかと思つてイラツとすると（笑）。で、もう少し下げていくとベッドが見えてきて、ベッドの枕元に家族の写真があつたり。やつぱり何らかのきっかけがあつて、



写真 ゴミ屋敷の内部

生活が閉鎖していく…。

市沢 一度に（そういう生活に）なるわけではないと。

屋宜 一度にはならないです、誰も。少しずつ少しずつです。

木村 たまに聞きますけど、自分ではゴミだと思つていないという…。

屋宜 そのケースは解決するのがとても難しいです。まだセルフネグレクトの方が救いようがあるのではないかなと思いますね。学生のセルフネグレクトがありましたよ。学校になじ

めなくて、友達できなくて、でも家に帰るのは親が怖くて、みたいな。ワンルームマンションに住んでいて、そこをゴミ屋敷にして、管理会社に怒られて、結局「追い出し」ですよ。その子はそこ（ゴミ屋敷状態の中）で普通に生活をしています。直接会いましたけど、「すみませんすみません」って最後に謝ってました。でも結局追い出しをくらって出て行くといくということになりました。

市沢 追い出されてからどうなったんですか？

屋宜 不動産業者からの依頼で、僕らが全部片付けました。

古市 「追い出し」も含めて（屋宜さんに）依頼があるんですか？

屋宜 僕は「追い出し」はしませんが、追い出されて、法的処理が終わった後の動産処理だけです。部屋を片付けないといけないので。

市沢 それもやはりそこにいたるまでにいろいろあったわけなんですか？

屋宜 ありました。（前述の「掘り起こし」の分析をして）床近くまでいったら、最初はちゃんと生活してたんでしょう。ですが学校になじめなくて、学校に行けなくなって、少し自分も鬱状態になった。けれども、家に帰ったら父親が強いので、ずっとそこに居るしかない、と。親は子供は学校に行ってるものだと思って仕送

りもするし、飯も食えてるわけです。

同じ部屋といえども見えてくる景色がいつぱいありますね。しかし、それを汲み取ってあげる必要があるのではないかと。僕は最後に家を閉じる人間として、そこを汲み取ってきちんと上手に閉じてあげなければいけないと思うんです。人だけじゃなくて、物であったり家であったりなど上手に閉じてあげる必要があると思います。

市沢 そういうことで、例えば遺品整理を依頼された方とお話をされることもあるわけですか。

屋宜 僕らは基本的に依頼者（相続人）とずっと一緒です。相続人と一緒に作業していきます。これは置いておきましょうね。これ処分しましょうね。これは買い取りましょうねと相談しながら作業します。うちの会社は、あたりまえのことだと思えますが、基本的に（作業に）立ち会ってもらいます。悪い業者の場合、依頼者が現場から追い出されて立ち会わせないこともあります。

古市 それは金目のものを持って行くためということでしょうか？

屋宜 悪い業者は、たぶんそうだと思います。作業がしにくいなどといって、追い出されたという人は何人かいました。本当にそんなことが

にあるのかと思いましたがね。うちは基本的に全部立ち会ってもらいます。で、立ち会えないという人も中にはいるので、そういうときは作業完了報告書といって、ピフォー&アフターの写真を撮って、こうやって終わりましたよといって送ります。本人や遺族に代わって、賃貸なら賃貸の鍵の引き渡しまでお手伝いすることもありますが、でも原則的には立ち会ってもらいません。

古市 家が孤立していくというのは、都心部だけじゃなくて、田舎でもおこりうる話ですよ。

屋宜 おこりうると思います。

古市 実際に作業をされていて、町と田舎の違いはありますか？ 孤立の仕方とかで。

屋宜 町のほうが悲惨ですよ。基本的にこのあいだ田舎の方で仕事したときなどは、近所の人と関係がよくなかったのか、亡くなった人と近所の人の関係性っていうのは、僕らが作業をしたら（如実に）出て来ますよ。どのような人だったかはわかりませんが、非常によくない関係だったら、実際（作業をする）僕らに対して、「トラックどけんかい！」とか言われたりします。恐い近所の人が出てきて「邪魔やがな」と言うので「ああどうもすみません、今日だけで終わりますので」と言っても許してくれず、作



業がストップします。そういうこともある。

市沢 厳しい…。

屋宜 で、この人が非常にいい関係を作っていたとしたら、道路をふさぐような状態で作業しても、近所の人が協力してくださいませ。逆もあるんですね結局。「やっと片付けるのね」と思っただけ協力されているのかもしれないけど、非常に良い人だったら、近所の人の方から寄って来られます。「あの人こんな人やってね」と話してくれます。このあいだ仕事をした所は、築一〇〇年の木造住宅だったのですが、亡くなったおばあさんの遺品整理をしていて、子供のいない夫婦でしたから、近所の人がその夫婦のことをいろいろ教えてくれました。「こんな人やってね、こんな趣味やってね」とかいっぱい話してくれま

した。けれども、故人がどういう状態だったかわからないのですが、いくら田舎であつても、よくない関係の人はそんなことは教えてくれな

いですね。田舎の方がみんな見えているから余計(そういう傾向があるの)じゃないでしょうか。

古市 関係性という意味でいうと、僕の実家は岡山の田舎なんですけど、昔だったら、今の(夏の)時期なんか窓を全部開けて蚊帳を釣って寝ているから、寝ている人間が外からみえるというような状況だったんですね。だから人間関係も作りやすかったところもあったんですが、最近空き巣が入るとかいろいろあつて、きちんと戸締まりするようになってるし、なんとなく都会に似てきている部分もあるなという感じはするんです。田舎だからといっても、かならずしもみんなが(近所の事を)わかっているという状況でもないのかなという気がします。

屋宜 それはあるかもしれません。確かに僕も小さいときに、宝塚市に住んでいたのですが、幼少期は鍵を閉めたことないです。小学校、中学校ぐらいまでいたのですが、震災で潰れてしまったんですが、それまでそこに居て、鍵を閉めた記憶がありません。となり近所みんな知ってますし、知らない人が入っていたら「誰やあいつ?」みたいに見ていたじゃないですか。今

はそういうのではないでしょうね。今その街もそうなんじゃないですか？ しょっちゅう行きますけど。それは田舎であつても都会であつても一緒でしょうね。

古市 そんな感じがしますね。まあ野菜などができたらお互いやりとりするんで、付き合いはそれなりにやつてるみたいですが、昔みたいに知らない内に誰かが入ってきているという感じではないですね。

屋宜 僕らが子どもの時、友達がいなくても勝手に友達の部屋で待っていたりしてましたね。

古市 そうでしたね。

屋宜 今はそういうことはもうないですもんね。時代かな…。

市沢 現場でいえば、ワンルームから大きなものでは築一〇〇年の家などもあるんですか？

屋宜 はい、ありますあります。一番凄かったのは築一四〇年。

市沢 それはどこですか？

屋宜 京都です。京都は築一〇〇年はザラです。

市沢 町ですか？

屋宜 町です。京都市内の大きい道路沿いに築一四〇年の家がありました。まあひどかったですね。超ゴミ屋敷。それこそ昭和初期の新聞などが出てきました。何かをくるんでいるもの新聞紙、これいつの新聞かと思ってみてみたら

昭和初期でした。そういうことがありますね。

市沢 それではまた具体的な話に徐々に寄っていきたいんですが、先ほどもでてきた、屋宜さんが「片付けてください」と依頼された時には、車のミニカーのコレクターでしたかね？

あの家のおじいさん？ そういう趣味物を取りに来ている業者さんが居て、そういうものをいからかで購入取つたりされてましたが、一つの現場を片付けるときにたとえばどんな業者さんと連携されるのですか？

屋宜 僕ら一社では何もできないんですよ。僕らが部屋の中でできることは、整理仕分けすることだけなんです。買い取る分であつても、細かいんですよ。たとえば、お酒に強い業者があつたり、着物が強いところ、骨董が得意なところ、おもちゃが得意なところ、楽器が得意なところ、いろいろあるので、買い取り専門のパートナー企業にもいろいろとご協力頂いてます。

市沢 そんなに専門業化しているんですか？

屋宜 そうですね。ある程度見ることができる人はフラットに見ることができますが、やはり得手不得手があります。このあいだ（あるお宅から）刀が出てきて、刀を買い取つてくれといわれて、そのままいつもの買い取り業者に見て

もらったら、刀のことあまりわからなくて、数万円にしかつけませんでした。得意じゃないから、高くて買えないじゃないですか。面白かったのは、剣刀関係の組合があるんですが、あそこに行つて査定してもらったら、六〇万円も値がついたんです。だから、見る人が変わつたら値段が違うというのがありますので、それは僕らも調べて極力良い値段がつけてくれるところを紹介します。逆もあります。このあいだ僕らが作業をしていて、お客さんが自分で呼んで買った買い取り業者が二人来たんですが、お客さんが呼ばれたことでもあるし、僕らとしても見てもらうだけ見てもらうたらいいのではと言つたのですが、その業者は「これは買い取られへん、これは買い取られへん、これは買い取られへん」と、「買い取られへん」ばかり言つて、「そやけどとりあえず持つて帰りますわ」て言つて持つて帰ろうとしたから、「何してんねん、あかんあかんあかん」と言つて僕は怒つたんです。「買い取られへんもん、なんで持つて帰ろうとしてんねん」と言つたのですが、自分らはタダで持つて帰つて転売することもなきにしもあらずですね。「持つて帰らんやつたら値段をつけてあげて？ 僕らはお客さんサポートしてずっと居るから」と言いますと、無理矢理三〇〇〇円位だけ付けてきましたね。「明細書は出ないのです

か？」と聞くと、「いやそんなないですわ」と言つて三〇〇〇円だけ置いて帰ろうとしたので、「メモでもいいから残して」て言つて無理矢理書かせました。もう、そんな業者が有象無象です。

市沢 それはかたづけの依頼人が連れてこられたんですか？

屋宜 インターネットで調べられたんでしょね。結局、僕らが紹介した買い取り業者には、彼らが置いていった分を見てもらうということになりました。もちろん値段はつきません。もう一回別の業者にみてもらいたいという人と、そういう逆のケースもあります。

あとは買い取りだけではなくて、ゴミを処分するのは廃棄物処理業者ですね。原則、一般家庭から出る廃棄物は「一般廃棄物」に分類されるので、一般廃棄物の収集運搬許可業者を手配します。その業者がまずゴミを処分する。あともう少し僕は特殊で、貿易してる会社を呼びます。日本でまずお金に変わるものはお金に変える。現金にしてお客さんに渡す。あとゴミにならずに、もう一回海外だったら使えそうかなというものを僕は貿易で海外に流しているんです。特に東南アジアに流しているのですが、そういった回収業者を手配します。そんなにお金には変わらないですが、これで処分代金は圧

縮できます。今、一番高いのはゴミ処分代金です。ゴミ処分代金はびつくりするくらい高いですからね。全部ゴミにしたらお客さんの負担額が非常にかかってしまうので、工夫して貿易会社を入れて、例えば食器とか、衣類とか、家具でも洋ダンスとか、そのような物だったら海外でも必要とされているので、たとえば（テープルを指さして）こんなのもいけますよ。

市沢 学校では（いらなくなったら）廃棄して（笑）。

屋宜 基本的に事務用品は廃棄になりますね。東南アジアに事務用品の需要はあんまりありません。求められるのは一般家具です。だから大きいのはその三つですね。

市沢 買い取りと廃物と輸出と…。

屋宜 そうです。買い取り、リユース、処分。大きいのはその三つ。これを分けてます。僕らはそれがメインの業務ですね。お客さまが残す形見分けの分は残してあげたりとか。あと、お客さまによっては、人形は供養してほしいといわれたらちゃんと供養して差し上げたりとか。お仏壇の供養依頼とか。そういうものもあるんです。いろいろと全部要望によって扱う。これは要るからこれは運送で持つて行つて欲しいとか。そうしたらまた運送屋の手配が必要になります。だから全部、分離発注です。

古市 ものすごいネットワークを持つておられるんですね。

屋宜 僕の名刺の裏をみてもらつたら、僕ができることって片付けしかないですよ。だけど、僕の片付け以外の相談いただくことを全部文字に起こして、何かあつたら、僕でお手伝いできることがあつたらなんでも言つてくださいねって書いています。

古市（名刺をみながら）なるほど。

屋宜 僕がするわけじゃないです。僕が自慢でできるのは、ネットワークです。僕をサポートしてくれる仲間がそれだけいるということが僕の価値になってるんです。友達の自慢話ばかりしてます。

古市 差し支えなければ、そういうネットワークはどうやってお作りになるのか、伺つてもよろしいですか？

屋宜 これはもう蓄積ですよ。本当に地道にコツコツとずつとやってきましたね。というのが、僕は全部「紹介」なんです。年間四五〇件の仕事の九・九割が紹介です。〇・一割がホームページ。その紹介先が相続ゾーンの専門家なんです。葬儀、相続、弁護士、保険。あと地域関連団体の人が、「屋宜さん、ちょっと見積もりの相談乗つてくれませんか？ 片付けたつて？」って。紹介のもとにやらしてもらつて、



明くる日とかに専門家を地域ごとに紹介していくという形です。

市沢 まあたしかに直接電話かけて「うち来て掃除してくれ」というよりは、相談してるところから行ったほうが、なんとなく本人もやりやすいというところもあるんですかね？

屋宜 うちの会社は営業マンが僕だけなので。僕以外全部現場担当なもので。努力しているっつていつかは、いい意味で常に誰かに見られるっつていうかね、ということを僕は意識しています。うちのスタッフには、「遺品整理では

一回しかお客さんに会われへんねんで。一回しか会わへんけど、もう一回会いたいって思ってもらえるように最大の努力をして来い。金を追いかけるな、人を追いかける」といつも言ってます。そうしたらリピーターが増えてきました。リピーターとか一般のお客さんからの紹介とか、三年経つてやつとちらほら出だしました。そんなに（遺品整理など）しないですよ、みな（笑）。

市沢 日常的ではないですからね。

屋宜 そうしたら何かあったときに、そういうえば屋宜さんおつたな、とか受け取ってもらえるようにしています。

ようにしています。

市沢 さきほど言われた、楽器とかおもちゃとかいろんなものを取り扱っている業者さんというの、基本的に一般的なおもちゃとか楽器とか扱っていて、たまたま仕事で遺品整理に屋宜さんの紹介とかで現場にも行くという感じですか？

屋宜 遺品整理専門の会社などはそんなにいないと思います。ましてや出張買い取りをしているところも少ないです。買い取り屋さんで意外とフットワーク悪いです。

市沢 ああ、（客を）待つてるわけですか？

屋宜 はい、だって店舗型ですから。例えばある大手さんの業者でも、一つの店舗に一人しかいないですから、出張買い取りに行けないですよ。店舗に持ってきて、それはしつかり見ますっつていうスタイルですから、出張買取でフットワーク軽くてちゃんとやってるところは正直少ないですね。僕も買い取り業者に何十人つて出会いましたけど、もうなんかしんどくなってきましたね。ちゃんとしつかり見積書を出してくれたり、しつかり値段をつけてくれるところとか（付き合いません）。あとは、お客さんに断る時にちゃんと丁寧にお断りいただくのは大事ななと思います。

市沢 「（買い取りは）無理です」と。

屋宜 はい。すごく上手いですよ。値段つけた瞬間怒られるものもいっぱいあるじゃないですか。本人は一〇万円で買ったものであっても、価値がなかったら「値段つきませぬね」って僕らだったら言ってしまうんですけど、(上手な業者は) そうは言わないですね。「ああ、うちじや取り扱いちよつと難しいですね」って断る。さすがやな、と(笑)。相手を傷つけないように言ってくれる。値段を言った瞬間すごく怒る人もいますからね(笑)。

市沢 大変ですね(笑)。

屋宜 特に着物は今はもう本当に値段がつかないんですよ。しかし本人はすごく値段が付くと思ってるわけですよ。値段がつかないって思いながらも、どこかでちよつとぐらいにはなるだろうと思ったりするんですけど、中途半端な値段つけた瞬間にすごくぶち切れた人がいました。

古市 着物のリサイクルショップって、うちの辺にもいっぱいあるんですけど、それでも値段つかないんですか？

屋宜 はい、値段はつきにくいと思います。一回持っていてみてください(笑)。本当につきにくいですよ。

木村 安く買いたたいて、高く売るとか、そういうことではないんですかね？

屋宜 古物の世界ってそうです。不動産と一緒に。人のを安くで買って高く売る。これが商売ですから、僕はどちらかというと、少しでも値段つけてもらって、あとは(業者が)自分で商売をちゃんとされたらいいと言う(スタンスです)。

木村 なるほど。では、亡くなった人の物だからって安く買い取られるということはあるんですか？

屋宜 それは本当によく聞きます。すごく安く買い叩かれてる人もいました。

木村 そこには日本独特な観念もあるんですかね？

屋宜 どこでも一緒だと思いますか。

市沢 遺品だからって…。

木村 霊が乗り移ってるんじゃないかとか。あるいは、もつとドライな国だったらただのモノではないかということと普通に取引がされるといふような感じなのかもしれませんか。

屋宜 日本人特有なのは、人が使ったものは使わないですね。たとえば、賃貸住宅で使える家具があったら、海外の人にとって置いていくじゃないですか。次の人が使えるように。しかし日本の場合、絶対空にしないといけないんです。ある大学の生協の人から聞いたんですけど、外国人学生が入る寮とかは、(かならず家具などを)

置いていくそうです。

市沢 次の子のためにつて(笑)。

屋宜 それは、よかれと思つてですね。

古市 そんな話ありますよね。寮でも、「留学生の入つてるところは、物を置いていきよつて、何しとんねん」と思つたという話を聞いたことがあります。彼らの考え方はそうではないと。

屋宜 そういう文化です。

古市 なるほど(笑)。

屋宜 仕方がないんです。だから、外国人留学生を導入するにあたつて、動産の所有権の移行の問題とかいろいろあります。家財道具は動くものなので動産なんです。海外留学生ほど荷物を残して行くという。

あとは、その遺品という概念で言うと、これは時代かなと思いますが、僕が遺品整理事業始めた九年前などは、遺品なんてそれこそ「誰がそんな死んだ人の物を使うねん」という風潮で、全部廃棄でした。今は違います。だいぶ時代が追いつきました。ただ、孤独死した現場とかからの買取は僕はやめときつています。どうしても腐敗臭で菌が舞つていますから。それはもう一切ないとして、普通に病院で亡くなったとか、部屋で亡くなったとしても早く見つかったというところの物については、やはりお金に変

わるものは変えてあげます。買取業者もその辺の価値観がちよつと変わってきたと思います。それは多分時代と違いますが、これだけ遺品整理という言葉が普及してきましたからね。

四 歴史資料のゆくえ 何をどう遺すのか

市沢 私たちが気になるのは、古書とか、とくに古文書とか。美術品はともかく、私たちはお金目当てではないけど、歴史的な資料とか文化財になるようなものが出てきて、そういう場合どうしたらいいのか、という点ですね。

屋宜 それはもう、たぶん先生方と連携させてもらわなかったら僕らはわからなかったなと思いますね。このあいだ（市沢さんに現場に）来てもらったみたいに、僕はこれまで本当に全部捨ててました。「そんなもん価値ありませんよ。捨てた方がいいですよ」って捨ててましたけど、これがその中にもしかしたら本当に大事ななものも眠っているかもしれないというの思ったので、だからうちの従業員にもいいました。何かあれば古文書的なものとか歴史的なものがあるなと思うたらとりあえず（自分に）声かけてくれと。僕から市沢先生に連絡するからって。

市沢 オーナーからはそういうふうに、大事な

ものは仕分けしてとかこれまで言われたことはなかったんですか？

屋宜 なかったですね。

市沢 それは古文書だから（捨てないでくれ）とかいうケースはなかったと。

屋宜 たぶんその辺の価値観の共有ができてないんだと思いますよ。

古市 旧家もいっぱいあるという話でしたが、そういうおうちでも古文書などに対して、要するにお金になると思っていないということですね。

屋宜 思っていないですね。

成功事例もありますよ。僕らが関わった豊岡の農家の例ですが、資料館に農機具を寄付しました。資料館に寄付できたので、お金には変わらなかったけど、資料館が何点か持って帰ってくれたので、それはちゃんと歴史的価値があるものを残すことができたわけじゃないですか。だけど、そう全部が全部じゃないですね。ほぼ廃棄になりましたけど。米を分けるやつみたいな。

古市 千歯扱せんばきとか、そんなものかな。

木村 民具類については、私たちも結構苦労するんですが、私たちのケースだと、普通に元気に生活されている人の所へ古文書調査に行つて蔵などを調査させてもらったときに、古文書以

外にもいろんな物があるわけですよ。道具類だ、着物だ、本だ。それこそさっきの話ではないですが、現代の人はそういうものにほとんど関心がなく、自分の家にそういうものがあることすら知らない。そこへ私たちが入つていつて、その家の方からみたらゴミやガラクタにかみえないものが、私たちはとても貴重な資料としてみえているというギャップがあります。このギャップをどうやったら乗り越えられるかが私たちの独特な悩みとしてずっと抱えて来ているのですが、屋宜さんの廻りにも似たような状況があるんでしょうね。

屋宜 そうですね。僕らも学ばせてもらったほうがいいと思いますよ。一般の人たちが（ギャップを埋めるために）学ばせてもらう機会を作っていた方がいいと思います。それこそ僕なんかもこのあいだの現場で少しだけ勉強させてもらったから、ブログに書くとか思います。うちフェイスブックページとかでも、大体一六〇〇人くらいの方に見てもらってるんですよ。ホームページはそんなにみられていないですけど。

市沢 我々はそれでお金を何かするということはないかなかできないですが。

屋宜 僕はそんなにお金を追いかける必要はないと思います、先生等のゾーンでは。

市沢 ただね、この前見に行かせてもらったときに、ミニカーとかそういうったものはどんな値段がついていって、現場にいて現金が整理をお願いされた方に渡っているのを見るのと我々の方は難しいなあと感じてしまいます(笑)。

屋宜 僕らはお客さんからお金をいただいてますからね。僕らはお金を頂いたうえに「ありがとう」ももらってますからね。そのように思うと、歴史的価値があるものはちゃんと残すことが(先生方の)使命なんじゃないかなって思いますよね。

市沢 そんな風に思えたらいいんですけど。まあこれは価値があるといわれたら、さっきの話じゃないけど、「じゃこれはいくらやねん」とか言われると、こっちは困ってしまうところもありますね。

屋宜 そうですね、それを何か金で売買されて悪いところへ流れていく可能性があるということですね。

市沢 悪いところではないけど、(買われた先で)結局死蔵されちゃうとか、というのがありますね。

木村 (こういうった現場のレベルでは)古文書というものにはあまり金額がつかないと思うんですが、美術品の掛け軸のようなお金に変わる

可能性のあるものが古文書と同時に出て来る場合があります。私たちがみると美術品はどんなものを所蔵されているのかも意味重要な事柄で、その家の先祖がいつ何を収集されたのかということが研究の対象になるという可能性もあるわけです。でも結局美術品というのはお金に換えるので、これは「資料」なんですとは所蔵者になかなか強くも言えないところもあって、いつも悩ましいところがありますね。かといって掛け軸がすべてにお金に換わるものでもないし、偽物も混じっているかもしれない。だから一応美術の専門、美術史をやっておられる先生とかとつながりを持つようになって、調査に行くときにはそういうた人たちと一緒にいくというのが僕らのやり方ではあります。ただそんな時でも、お金になるという発想にはあくまでならないです。

市沢 屋宜さんの紹介で前に行かせてもらったおうちには、自分の家の歴史的痕跡というのをきちっと博物館なり何なりに残したいというご意志だったと思うんですね。だから、家を閉じるにせよ、無くすにしろ、とりあえず古い家に關しては自分らの祖先が生きてきた記録みたいなのがどっかに残ったほうがいいという風に一般的に考えられるのか、そんなことはどうでもよく、とにかく目の前のものを一掃してくれみた

いな話なのか、その辺も大きな分かれ目なのかなと思いますね。

屋宜 そこはたぶん二極化しますよ。僕らのお客さんでもちよつとでも大事に扱ってる、伴ってあげたい家を閉じることに對して引け目を感じてるという人もいます。

市沢 やつぱりそうですか。

屋宜 そういう人なんかは常に、「ぎゃーと捨てるんじゃなくて、ちゃんと丁寧に扱ってほしい」って言われます。

市沢 どこかに残すべきものを残してほしい、ということですね。

屋宜 逆に「煩わしい」というケースもありますね。「煩わしい、早よしてくれたらええのに、金払うから早よ直してくれ」という人もいます。それはもう仕方がないですよ。でも僕らはお客さんを選べるわけじゃないんですが、僕はそういう人ほどじっくり見えます。「何もいらんねん」と言っている人ほど、何か手に持つて帰ってもらおうというのをします。だから、僕は思い出ボックスと呼んでるんですけど、ダンボールに何か一つでも入れるように努力してます。だから、歴史的価値なのか、価値観によって人によって違うんですね。まだその中でも「何も買取るもんなかないわ。全部捨ててくれたらええわ。」といわれて、その中で買取る



ものがこの間なんか三万円くらい値段が付いたんです。それは何かというとハワイのタンスだったんです。ハワイ産の洋タンスに三万円ついて、おばあちゃんすくすくニコニコしてました。そういったものが何もわからないまま捨てるといふよりは、やっぱり何らかの価値がわかる人を連れて行くということが大事かなって思いました。それこそ僕は歴史的なこととはわからないから市沢先生とか皆さんに協力いただいて、僕ら自身も学ばせてもらったほうがいいですね。

木村 僕らも逆を考えた方がいいんですかね？
たとえばよく悩むのが、古文書が入っていた容器がいろいろあって、古いタンスだったり、長持という木箱の大きいものとかに古文書が満載されているのを、このままでは調査ができないので、ダンボールに移し替えるんですけど、すると残った元の容器はどうするのかと。ほとんど廃棄になるというケースが多いんですが、ひよつとしたら（和筆筒などが）売れるかもしれないと思ったら、屋宜さんをお願いしてもいいんでしょうか？（笑）

屋宜 売れるものは本当に一握りです。
木村 本当にいつも悩むんですよ。このあとどう処分されたのか。多分、家の人が普通に廃棄されてるんでしょうけど。
屋宜 でも処分するんだつたら、一回屋宜を紹介しようかって言ってくれたら、僕なんかは査定しに行きます。

市沢 パートナーの一つにうちらも加えてもらうという（笑）。
木村（屋宜さんから僕らへだけじゃなく、僕らから屋宜さんへ依頼という）逆もありということですね。
屋宜 それ面白いかもしれないですね。
市沢（筆筒などの処分に）「困ってるんやっ

らこういう人が居るんだけど」っていうね。
屋宜 僕ら最近よく川西市に行くんですよ。川西といっても上（北）のほうへ行くと結構田舎町じゃないですか。ああいうところへ行くと結構（古文書などが）出て来るんじゃないかな。
市沢 僕の親せきが豊岡にいますが、旧家らしき建物や蔵が急になくなる光景を見ます。そういった場合、根こそぎぶつ潰しているということがありますか？
屋宜 価値がわからない人はそういうことしたりしますね。
市沢 根こそぎぶつ潰す時は、中身はどのようにしてるんでしょうか？
屋宜 それはもう絶対今の時代、上物、容れ物、廃材は産業廃棄物で、中の物は動産で一般廃棄物なんです。こういう風に分けられます。だから、解体屋がやることと、僕らみたいな遺品整理屋のやることは分かれています。
市沢 じゃ、その時は遺品整理の、というか遺産整理の業者が入っている可能性が…。
屋宜 可能性はなきにしもあらずです。ちよつと思いだしたんですけど、こないだ僕の知り合いの骨董屋さんがいるんですが、骨董屋さんは蔵ごと買います。
市沢 ああ、もうそういう感じなんですね。蔵ごと買う…。

木村 よく聞きます。阪神・淡路大震災の後とか本当によく聞きました。

屋宜 このあいだ骨董屋さんが言っていたんですが、蔵の場合はプラスマイナス関係なしらしいですね。表で見えているものだけぱつとみて、これはいけるといふ勝算があったら五千万円とか入札やりますって。もう凄い話です。で、こら無いなって思ったら、百万円でも要りませんわといって止めるって言っていました。

市沢 そういう骨董屋ともお付き合いがあるんですか？

屋宜 あります。うちは骨董屋でも能力がある方を見つけたんです。

市沢 それは古文書も扱うんですか？

屋宜 古文書はやってないと思います。

市沢 ということは、値段を付けてるときに、古文書の束なんかも視野には入っていないんですかね？

屋宜 一応、視野にはあるかもしれませんが。

市沢 ありますか。

屋宜 といいますか、僕のパートナー整理業者だけで今全国で八社と、パートナー企業だけでそれなりにあるので、こういうものがあつたら声かけてねという資料ってこれ（地域連携センターの紹介パンフレットを指して）でいいんですかね？ もし、パンフレットでも、これでい

いのでしたらこれでいいですし、うちのパートナー企業に全部送りますよ。

井上 後でまた持つてきます。

屋宜 送ってもらってもいいですし。特に名古屋とかめっちゃ面白い物がいっぱい出てきそうですね。名古屋とか岐阜とか。

あれあかんのですか、欄間とかないですか？あれやとめっちゃ凄いものとかありますよね。

古市 去年、あるところで由緒ある遊郭が何軒か解体されて、そのの什器——椀とか——が売られてきたって聞きましたけど。そんなところだつたら、欄間などでも多分ええもんあるんちがいますか？

市沢 そんな現場には自治体の文化財課の関係の人が現れるということもないわけですか？

旧家だつたりするときに。

屋宜 僕らが経験したことはないですね。もしかしら、それ（自治体文化財関係者）が入り終わった後かもしれないですけど。

古市 あまり入っていないかもしれないですね。

木村 文化財指定物件でも無い限り入っていないかもしれないですね。

屋宜 なんかこういうのとか、僕らも学ばせてもらっていることは大事なことでなあって思っています。

市沢 たとえば前行かせてもらったMさんの場

合、古文書は当主の名前で「M××氏所蔵文書」ってタイトルが付いて、自治体の文化財の

収蔵庫にきちつと入りました。こんなこと言っちゃ何だけど、Mさんが亡くなっても、某市の収蔵庫がある限りM家の歴史というものはあそこの中でずっと生き続けるということになるんですね。だから、われわれの場合は残念ながら古文書だけでそれ以外のものをどうこうしてくれつていわれても、できないんですけど、家はたんでも家の名前はきちつと残すみたいいな、家の歴史はきちつと残すみたいいなことをやってほしいという人がいればいいなと思いますね。

屋宜 僕のお客さんが歴史を変えられるかもしれないということですね。

市沢 まあそんな凄いものはそうそう出てこないですけどね（笑）

屋宜 でもそれはわからないですよ。なにかロマンがあるじゃないですか。もしかしら僕らに関わったお客さんが歴史を変えられるかわからないという。

市沢 まあ何か出て来るかわかりませんが。屋宜 ロマンあるほうがみんなワクワクするじゃないですか。

井上 さきほどの美術品込みの話なんですけど、結局私たちの弱点は、古文書だつたら対応できるんだけど、そういう欄間とか美術資料

とか、あと民具類になるともう全然わからないところですね。私は割と田舎担当なので、単位が「箱」じゃなくてほしい「蔵」なんです。蔵つて一昔前だったら、ほぼ文書しか入ってない蔵つてのがあるんですが、今の田舎の蔵つて物置と変わらないんで、そういう所に入つた時に文書以外のなんともなく歴史的に役にたちそうな、大事そうな物があるんだけど何もできないということがあります。あと、文書だけ必要なものだけ出してもらったら、あとは捨てるからという話を（蔵の所有者に）されたとき、そこで捨てる勇氣が（研究者には）湧いてこないというか、ここで私が捨てていいのか（と躊躇してしまい）、捨てても大丈夫ですよって言うことが言えないというところがあつて、そういうところであつていろいろんな人と協力できるような体制というものがむしろ私も欲しいなと思つてるところです。実は担当地域になんでも屋さんをやっている方がいらつしゃるんですけど、私たちのやつていた講座に来て下さつて、そのあとたまに家じまいのことをされてる時に、「こんなん出てきてんけど捨てても大丈夫か？」ということを相談してください方ができて、そういう意味ではちゃんと知つてもらおう、捨てる人達に捨てないでついでいる場をもつとちゃんと作つていくというのはこちら

も一つ努力しなければいけないことじゃないかなという気がしました。

屋宜 もつとSNSを使つたらいいと思うんですよ。LINE@を作るとかね。

古市 僕らが一番苦手なところですよ。

市沢 さつきの話じゃないけど、動かないで基本待つているところが確かにあるね。

屋宜 もし大人が動かないんだつたら、子供らに出前授業するとかね。こういうことを研究してるんだ、こういうことやってるんだつて小学校に授業させてくれて、僕なんか廃棄物（処理業）の時に小学校に出前授業スタートさせました。子供たちに3R（リデュース（Reduce）、リユース（Reuse）、リサイクル（Recycle））を教えたり、パッカー車を持つていってこういうふうな（ゴミ収集を）やるんだよつて教えたとか。で、それを教育委員会が認めて会社の事業になりましたからね。誰かがやりだすとすべて全体の事業になつていくと思います。

井上 最近、区有文書を調査するにあつて区長さんとお話していると、その区長さんがまわりの区長さんに言つてくれて、うちにもあるぞつて話があるようになりました。同じように考えたら、捨てる立場にいる人達にアクションをおこしていくことで捨てるということが減つていくんじゃないかなと思います。

屋宜 良いと思います。僕はセミナーを年間一〇〇本くらいやつてるんで、そういうときにこういう（地域連携センターのパンフを掲げて）のを一緒に渡すとか協力できるかもしれないですけど。去年一年間僕で受講者三〇〇〇人くらいですから、だいたいそれくらいの方は聞いてくれます。

木村 セミナーというのは向こうから講演依頼



写真 セミナーでの屋宜さん

があるんですか？

屋宜 全部依頼です。

市沢 どのところから依頼が来るんですか？

屋宜 専門業界で言うと、不動産業界とか行政書士会、社労士会、税理士会、あとは地域の関連団体、NPO、コープさん、葬儀屋さん。(講演機会として)一番多いのはその専門団体が集客をしたい時ですね。ハウスメーカーや住宅メーカーとか。不動産オーナー向けで勉強会してはるんですよ。そういう中で、家を閉じるところということなんだよみたいなことを講演します。

市沢 住宅メーカーがセミナーをやってるんですか？

屋宜 そうです。

市沢 家を売るだけじゃダメということか？

屋宜 オーナーさんが高齢化しているということですね。オーナーさんが高齢化してて、自分たちも家を閉じないといけないとか、入居者が孤独死した時どう対応するのとか。というのは、管理会社もよく分かっているないので、僕は孤独死、孤立死の現状とか無縁社会の現状とそういうテーマで喋ったりとかします。あとは、社会福祉協議会とか(でも講演します)。社協はすごいですよ。このあいだ、尼崎でやったときは三〇〇人くらい言ってました。京都劇

場でやったときは九〇〇人来ました。

古市 世間の皆さんはそれだけ関心を持っていてということなんですかね。

屋宜 ほんとうにありがたいです。

市沢 「予備軍」ということなんですかね？

屋宜 「終活」っていうテーマでみんなやっておられますね。

五 これからの家じまい

市沢 そろそろ時間が来たみたいですけど、最後になりますが、幸せに世代交代が行われるため大事なのが廃棄されないために、という点に関して屋宜さんはどういうご意見を持っておられますか？

屋宜 それはもう「事前準備」ですよ。生きてる間に自分の意志表示をするしかないと思っています。これができるのは自分が生きてる間しかないんで、この事前準備をしつかりしておいてもらわないと全てぐちゃぐちゃになります。基本的に子供達も、情報共有もしてない、価値の共有もしない、思いの共有もしないというこれが今の時代(の現状)なので、それをちゃんとしつかりと掘り下げて、自分の思いを整理して伝える準備をして、準備をしたものをちゃんと伝えるまでしないと、もうこれはうまいこと

いかないと思います。これがもう崩壊してるわけですよ。僕は口酸っぱくこれを言うためだけにセミナーをしています。

市沢 事前準備のときに、我々のような関心を持つてる人達もいるよという話が、当事者の耳に入れればいいわけですね。

屋宜 そうですね。「わしや死んだらどうでもええねん」という人が中にはいますけど、それでも一部ですね。やっぱりどうしたらいいのかわからない、子供に言っているのかどうか、どうしたらいいのか、何をしたらいいのか、することがわからないという人が大半です。そういうことを教えてあげるのが、我々専門家の役目なのではないかと思えます。僕は専門家じゃなくて現場人ですけど、現場を見ててそう思いますね。

古市 些末な話なんですけど、いろんな業者がいるという話なんですけど、グレーな部分やブラックな部分があるというのはよくわかるんですけど、そういうところってあまり大きな企業というのは入ってきたりはしないんですか？

屋宜 この業界にはまだ入ってきてないです。

古市 その可能性もないと？

屋宜 これは入ってくると思えます。僕は入ってきたほうがいいと思っています。なぜかという、廃棄物と法律にはみんな触れたくない



んですよ。「動脈産業」、「静脈産業」というものがあって、物流業界という動脈産業というのは日本通運さんと佐川急便さんとかクロネコヤマトさんとかいう物流の会社ですね。静脈産業というのは、廃棄物処理業なんです。廃棄物処理業の人間がどちらかというと（この業界を）担ってますね。静脈産業がこの業界を担ってるわけですよ。なんでこちら（動脈産業）側の世界の人間が、表にも出てるメディアにも出てる業界的にも有名な大手がこの業界に入らないかという、ブランドイメージです。要するにクリーンに物を運んでいる者がゴミを触るのか、と。ブランド価値が変わるわけじゃないですか。それを恐れて入ってこないだけだと思えますよ。僕は入ってきたほうがいいと思っています。僕が人生目標に置いているのは、この業界を健全化していく、社会的地位の確立が僕のテーマなんです。これをしなないといけないって僕は思っています。それをするためにこういう普及活動をやっています。僕だけが

担うわけじゃないです。もつともつと大手が担えばいいと思っています。次に電通、リクルートあたりが遺品整理を宣伝し始めたらもう「勝ち」ですよ。でもあのあたりがやってきたらこの業界はぐちゃぐちゃになります。「思い」が先行しない、安けりやいいという価格破壊に巻き込まれますから。

古市 そういう、人の顔が見えてるところのコミュニケーションで、お金で仕事をするのではないという話をされてるわけじゃないですか。その部分と、もちろん大きな企業が入ることによって健全化するという部分もあると思うんですけど、そういうのが入ってくることによって、人間同士の関係が希薄になっていくっていうことは、良い悪いの話じゃないですよ。お葬式などでも、二〇年位前に私の祖父が亡くなったときは、村で葬式をしたんです。村というか自分の家が会場になって、みんな足がしびれながら正座してやっただんですが、今はもう、うちの村でも葬祭場でやるんです。その方がみんな楽なんです。それが関係性という意味では希薄化といえますよね。商品化の善し悪しの話とは直接関係しませんが、これから人間同士の関係性がどういう風になるのかなってというのが気になります。

屋宜 僕はもつと業界が安定しない限りは悪い

業者が有象無象になってくると思っています。最悪の事態になってくるとこの業界が無くなると思っっています。そういう危険性もなきにしもあらずです。だからもう誰も信用できないという、どこにいてもどうしようもない、遺品整理は他人に任せたらいけないってそこまでなれたら一番いいですけどね。ほんとうは家族でやることなんで。だけど悪名高くなって(排除されてしまい)業界がなくなること自体もなきにしもあらずじゃないですか。だから僕はこの業界をちゃんと健全化していくために基準作りとQC (quality control) を考えるに至っています。それをやって社会的地位を確立していくことが僕は大事だと思っっています。僕がいつも授業で使う話なんです、たとえば同業の遺品整理屋がいて、「可愛い女の娘の前で、仕事何してるって話になったら何て言うねん」ってこんな質問をしたら、「運送屋で働いてる」とか、「荷物を運んでる」というわけです。「なんで遺品整理っていわへんねん」というと「いや…、いや…、いや…」とやって答えられないですね。(現に遺品整理屋として)働いてる人すらも自分のやってる仕事にプライドを持っていないんですよ。これはこの子らにちゃんと意識を持たせるためにもこの業界を健全化していかないといけない、胸を張ってやれる仕事である、胸を張っ

てやれる職業であるというふうにすることが僕は大事だと思っっています。業界自体を健全化していかないといけないと僕はそこを担っていききたい。うちの子どもなど幼稚園の時に、「パパの仕事「遺品整理」やってる」って幼稚園で言ったらいいんですが、それはやめてくれて、そこでは言わんほうがええやろ(笑)。遺品整理ってな〜につて(笑)

市沢 最近はずとテレビでもちよくちよくそういう仕事があるんだっていうことは出ますね。

屋宜 時代を作るっていうのは何十年もかかりますからね。自分の中ではゴールは一五年つて決めています。一五年以内つて。

古市 一五年の今は何年目ですか？

屋宜 一五年のうちの一四年目に入りました。

市沢 しかし、いくら大手の業者が入ってくると言っても、インターフェイスというか、関わり方が濃密じゃないとダメな仕事じゃないですか。ビジネスライクにはできない。

屋宜 難しいと思っますね。正直、そんなに利益が残る仕事じゃないですからね。

市沢 遺品整理した後、遺族の方とやりとりされてるとかいうことはあるんですか？

屋宜 一応LINEしますよ。よくLINEが来ます。お礼のメールなんかLINEでもらいます。「屋宜さん、従業員にありがとうつて

いうといてね」つて。この間もお客さんに(お礼のメールを)もらつてすごく嬉しかったです。フェイスブックとかツイッターのフォロワーになつてくださつたり。

木村 さつき言つておられたりピーターというのは、そういう人達と関係が続いてて、またその方々から依頼が来るということなんですか？

屋宜 そうです。一番良いのは、まだ一〇〇%じゃないですけど、屋宜さんに何か仕事つてあげたいと思つて下さつてるフォロアーです。すごく理想的ですね。僕の仕事なんかありません。この三年間営業してまっすけど、僕から仕事下さいなんて誰にも一回も言つたことないです。何か仕事を作つてあげたいつて思つてもらえてるのかなと思っます。

市沢 さつぎの話で、古市さんが言つたことに引つかつたんですが、価格競争つてやつぱりあるんですか？

屋宜 ありますあります。うちの会社が見積もりに行つての作業依頼の受注率つて八割なんです。ほぼ受注ですね。これは何故かつていうと紹介だからです。誰かの紹介だから受注できる。ウェブ上でいうとインターネットで集客した場合の受注率は大体二割つて言われています。これは僕も統計を取りましたが、やつぱりインターネット上の依頼というのは相見積りあ

りきですね。(傾向として) 価格破壊に入っている。僕らも紹介であつても相見積もりは取られます。僕らの場合は誰かの紹介だから、「ちよつと屋宜さん、A社がこんな金額やからもうちよつと下げといてくれへん？」という値段交渉は、今は関西の方ではあります。関東は違いますよ。関東はフェードアウトしますから。見積出して気に入らなければそれで終わりです。関東の人は、値段交渉とかは関係ないですから。

井上 値段は似たり寄つたりなんですけど、ここにしているのかつていう迷いが生じるんですよ。で、結局頼まないで終わる。

市沢 そういう意味では、この業界は信用が全てですよ。

屋宜 そうですね。

市沢 お金もあるんだろうけどね、高い安いという。(高いところと安いところでは) 全然違うんですね？

屋宜 全然違いますよ。ひどいところに当たると、たとえばこの部屋を片付けようと思つたら、一〇万円ですわつていうところもあるれば、一〇〇万ですわつてところもある。それぐらい振ります。けどどういう計算かわかりませんが、大体みなバランス良く揃いましたね。うちはうちの独自の計算方法がありますか

らね。うちの会社で一応一件単位の営業利益一〇%を目指せて言ってます。いくらの上で、月の売上目標、週次、日次まで落として一年間通して「けいつね」(経常利益)一〇%を目標にしています。けどもいかなんです。実際の数字でいって六%です。あんまり言つてはいけないんですが、ゴミ処分代金、うちの会社だけで去年六未決算で終わったのですが、うん千万円払いました。このくらい徹底してコンプラ(イアンス)守つてやるとそうなります。

市沢 不法投棄とか無くきちつとやろうと思つたらね。

屋宜 自分で不正運搬したりという業者が一般です。僕らは廃棄物処理業も経過してやつてきたから、廃棄物コンプライアンスだけは守っています。あとは買い取るつていうのもちゃんとコンプライアンスを守つた上で、あとはモラルやと思うんですね。僕らはどちらかというとマインド教育だと思つているので、そういう心理的な教育は(社員に)しています。

市沢 東寺の骨董市とかに行くと、個人の葉書とか個人の手紙とかは、そのまま売ってますから(笑)。

屋宜 よくないですね。

市沢 こんなものどのようにしてここに持ってきたのかつて思うようなものがあります。プラ

イバシーも何もない。

屋宜 僕らはプライバシーがあるようなもの場合は、原則可燃物というものは焼却場に行くんで可燃の袋に入れるんですが、お客さんによつては、個人情報破砕選別してほしいつて言われたら、溶解(処理)に出すとか、破砕機、裁断機に入れるとかします。そんなに高くないですよあれ。古紙回収屋とかマツダ(株式会社)とか大本(リサイクルセンター)とか持つていたら破砕をする機械一キロあたり一〇円とかでやつてくれるので、そんな高くないですよ。だけどもんなこと知らないと思いますね。個人情報報守らないとかね、そんなもん関係ないわと考える人も多いですよ。だけど、お金がかかる話だからどうするつていうことは聞きますけど。

市沢 なんかこう良い関係を作つて、いろいろある関係の一つに大学も入れてもらつて、また生前にもし悩んでいる人がいたら、また木村さんが行きますので(笑)。

屋宜 歴史的な破壊をバンバンしてきたかわからないですね、恐いことです。僕らもわからなかつたですから。

市沢 今後ともよろしく願ひいたします。どうもありがとうございます。

インタビューを終えて

「家じまい」が爆発的に増えている社会とは、どのような社会なのだろうか。屋宜氏のインタビューを終えてまず考えさせられた。人が生きる場の流動化が、(動産、不動産としての一(下同じ)「家」の継承をこれほどまでに難しくしていることに、驚きを禁じ得なかった。数年前、新聞の投書欄で、親が苦勞して建てた家を更地にして売却した人が、その感慨を記した投稿を読んだことがあった。自分の親の姿が重なり、とても寂しい気持ちになったことを思い出す。これから先、「家」はどうかたちを取っていくのだろうか。

「家じまい」と歴史史料の関係は、災害と歴史史料の関係とよく似ている。事前に史料の所在が明らかであれば、災害においても、「家じまい」においてもそれを保全する手がかりになる。また、災害や「家じまい」が未知の史料を発見する契機にもなる。そう考えるなら、私たちは「家じまい」に対して、災害と同じぐらいのアンテナを張るべきかもしれない。

インタビューでもっとも印象的だったのは、屋宜氏の「家じまい」が廃棄物処理、買い取り、リサイクルなど様々な業者とのネットワークで

行われていることであった。言わずがなではあるが、このようなネットワークに文化財関係者も積極的に参入していくべきであろう。そうすれば、今回のインタビューの趣旨文にも記したように、現場で歴史史料を確保することも可能になるだろうし、屋宜氏も指摘しているように、業者の側にも歴史史料に対するセンサー感度を高めることにも繋がる可能性がある。

しかし、同時にそのことは、私たちが取るべき姿勢に反転してくる。例えば私たちが「蔵じまい」の場に臨んだとしよう。私たちの関心は歴史史料にあるが、蔵の所有者にとつてそれは処分すべきモノの一部であつて、すべてではない。このような非対称のなかで、私たちはどうすべきだろうか。もちろん、無責任な処分や提案はできない。屋宜氏が持っているような専門業者のネットワークを私たちも持ち、蔵全体をどうするかという問題に向き合うべきではないだろうか。きつい言い方になるかもしれないが、文書の「抜き取り」に対して厳しい態度を取るなら、文書だけを「抜き取る」ことにも自省が必要だろう。

最後に、「歴史研究の隣人」という特集について言えば、この「隣人」とは誰かを考えることそのものが、公共圏における歴史のあり方を考える手がかりになるのではないだろうか。屋

宜氏の話伺いながら、その思いを強くした。

(市沢 哲)